

歴史の流転する中で、人は常に歴史の中で生きていく。歴史は過去の出来事だけではなく、現在の出来事でもある。歴史は未来への教訓となる。歴史は人間の進歩を促す。歴史は人間の文化を伝える。歴史は人間の心を豊かにする。歴史は人間の生活を豊かにする。歴史は人間の未来を明るくする。歴史は人間の希望を燃やす。歴史は人間の夢を叶える。歴史は人間の命を救う。歴史は人間の愛を伝える。歴史は人間の絆を深める。歴史は人間の誇りを高める。歴史は人間の尊厳を守る。歴史は人間の自由を保障する。歴史は人間の平等を実現する。歴史は人間の平和を築く。歴史は人間の繁栄を促す。歴史は人間の幸福をもたらす。歴史は人間の未来を輝かせる。歴史は人間の希望を叶える。歴史は人間の夢を叶える。歴史は人間の命を救う。歴史は人間の愛を伝える。歴史は人間の絆を深める。歴史は人間の誇りを高める。歴史は人間の尊厳を守る。歴史は人間の自由を保障する。歴史は人間の平等を実現する。歴史は人間の平和を築く。歴史は人間の繁栄を促す。歴史は人間の幸福をもたらす。歴史は人間の未来を輝かせる。

歴史の流れの中で

## 自由の道を阻む者

自分が自由を欲するように、他人の自由は尊重せねばならない。

これは我々アナキストの信条のひとつである。

自由を獲得するための闘いは、官僚や資本家などのいわゆる支配者階級への闘いばかりではない。被支配者階級の中にもまちがった観念に捉われて、我々自由獲得のために闘っている者の運動を逆宣伝して阻もうとしている者もあることに心づかねばならない。彼ら、自由の運動阻害者には二通りの型がある。

その一は、ブルジョア階級の甘言にのせられて、自分が将来資本家になれると信じ、その時を夢みて哀れにも自分の肉体が消耗することにも、また限りなき搾取に従うことにも何ら不平不満の念を起こさず、肉身の子弟にまでもこの酷使に耐えさせている存在。彼らはこうして現在を生きることを、人間としての当然の使命の如く感じている。

その二は、現在の経済生活の苦しさのために我々アナキストの説く自主性の強調、自治、自由連合体の正しさを意識しつつも、支配者階級のカイライとなって群集心理を悪用して攪

乱せんとするボス型の存在。

これらの存在とも闘いつつ支配者階級と闘うことが今日の我々の日常である。

夢の世界だといわれていたことが、今日一歩ずつ我々の意の如く実現しつつある。地方自治の強化、各所にできつつある協同組合等々、少数者といえども我々アナキストが説く万人幸福への道は、日一日と進展していくのだ。私もまた自分が自由を欲するように他人の自由を尊重して、過去に先輩が辿ったように、いばらの道を踏襲して日常闘争を続けている。

過日こんなことがあった。自治警察の人事異動で、たまたま私の住む町の駐在巡査が更迭された。新任巡査が第一番に前任者より送り引継ぎをうけたのは、この町に巢喰う闇屋バク徒の存在であった。将来協力の必要な主要団体への挨拶廻りは後日にして、新任早々旧駐在巡査とともに、前記闇屋が開いた歓送宴に出席した。その宴会が終り、一同解散後の路上で、闇屋が通行人に暴力行為をはたらいた。迷惑をこうむった善良なる町民は告訴の手続きをしようか、どうしたものかと迷っていた。このことを知った新任巡査は自分が一連の関連があることから「たんなる酔狂」として、善良な人民に泣き寝入りさせようと努力している（暴力者は権力を自負していたと思う）。

このように腐敗した官僚に対して断乎として闘いをいどんでいる私ではあるが、それすらも逆宣伝しようとする「カイライ」があることを思う時、永年の封建的教育に影響された大衆に対し、権力を否定していくことをいよいよ明らかにしようとして一層健闘している。

『平民新聞』（東京）75号 一九四八年六月

### 幸福への抗争

独立後の日本の体制、これに呼応して複雑な国際問題に対処するための外交方針、こんごの防衛とかいう問題等について、二十四日から政治屋共の集りが、いわゆる国会という名のもとに開催されているが、どうせ人民には徴税義務の負担を大きくされるくらいが関の山であろう。（註・一九五二年一〇月の第一五特別国会）

議会が開かれるごとにふえるものは、人民を束縛する法律だけであって、決して民衆の幸福になるような申し合せは出来上らない。それは何故だろうか？

それは、ほんとうの人民の代表が選ばれて政治をして居るからではないからだ。ほんとうの政治をするためには、ほんとうに、人民を代表する人間を、各地域、各団体、各グループ

その他あらゆる生産、消費組合等から選出して（その方法はいろいろある）人民の幸福のために審議しなくてはならない。

我々の住んでいる現実の世界は、ことごとく政治の世界である。国家と権力の存するかぎり、如何なる社会ができて、我々の日常生活の些細な部分に至るまで、ことごとく政治の干渉を受けないではいられない。だから今日我々の思想と行動を進めて行こうとすれば、当然現在の政治との正面衝突なしには何事もなし得ないのである。その意味において我々の運動はまた全面的な政治闘争であると言ふことができる。

しかし我々の政治闘争は世のいわゆる政治運動とは根本的にちがうことも自明のことである。我々は、政党政派を作ったり、国会の議席を占めたりして、数によって政権を獲得し、その権力によって社会の改革をなそうとするのではない。そういう方法によっては、政治変革はできても社会革命はできない。

われわれの政治闘争とは、現存の政府及びその機構と闘争するはもとより、これにとつて代らうとする一切の政党政派とも闘争することである。それは右翼とか左翼とか、保守とか進歩とかいう言葉のアヤを問うものではない。政治と権力によって社会を支配しようとするものは、ひとしく我々の敵である。我々の運動は、そういう政治の破壊であり、民衆自治組

織の確立である。権力亡者や政党政派は、民衆の自治組織が進んで行けば、あらゆる理論と手段をもつてこれを妨害し、破壊しに来るであろう。此処に我々の政治との闘争がある。この闘争による自己防禦なくしては、民衆の自治組織は決して成長しないのである。

そのためには民衆がもっと目覚める必要がある。現在の政治屋や支配者共が如何に反動であつても、その数はごく僅かなものでしかない。その僅かな支配者階級のために大多数の人民が何時までも不幸な日を送っていることは、あまりにも氣力がないというものである。

かつての東条が横暴だったとか、極悪人であつたなどと今でこそ言うが、彼だとして自分だけの力であれまでのし上つたのではない。戦争中に確かな自意識と神経で、東条を嫌つていた日本人が幾人あつただろうか？ 魚河岸に現われてマグロの頭を突ついたり、街を歩いて馬車を引く男と握手したりする東条に、我々の東条さんと拍手を送つたのは人民大衆ではなかつたのか。

破防法を通した主力は自由党と緑風会だといわれているが、しかし、これらの政党の性格として、破防法を作りたのは当然のことである。今さらなじつてもはじまらない。責任はそういう政党に、議会における絶対多数を与えた人民大衆自身にあるのだ。民度の低い世界においては、代議制度は必然的にこういう結果をもたらすのである。天の一角から風雲が沸

くように、ジンギス汗やアレキサンダーのような独裁者が現われることは、もはや遠い時代の奇蹟である。現代の圧政者を作り出すものは大衆の不明である。

反動政治屋共がいかにあがいても、民衆さえしっかりしていれば、彼らだけの力では何ごともなし得ないのである。政治屋がどんなにだまそうとしても、民衆がその手に乗らなければ、彼らの独り芝居に終るだけである。政治屋に対する非協力、不支持こそ、何にもまして現在に於ける手痛い抗議なのである。これは消極的なレジスタンスの一つでもである。誰にでもできることでもある。

ただ、我々が戦略戦術の上で左派と呼ばれるものと一時同じ途をとり、席を同じくすることがあったとしても、それは彼らを助けるためではなくて、彼らの政治的野心を粉碎し、これを破壊するためである。決して共同闘争ではない。彼らも現政府を倒そうとし、我々も倒そうとしている。その点では一致しているが、彼らは党派の力によって権力を奪取しようとするに對して、我々は民衆の自治組織によってこれを消滅せしめようとするのである。たとえ現政権を打倒しても、この民衆の自治組織が成長しない限り、又新しい政権が樹立されるだろう。政権の存するかぎり我々の闘争は不断につづけられるだろう。

『平民新聞』(飯塚) 35号 一九五二年一月

### 職業化した政治——腐敗の原因——

吉田政権が鳩山政権に変わっただけで何も政治のあり方が変わったわけでもあるまいに、今にも明るさが取り戻されるかのように人々はさわいでいる。さわいでいるといえば、センキョを目の前にして、このところいろいろな会の結成式が行われている。これもみんな権力欲をユメみる人間どものあがきらしい。

いまの政治のやり方のどこが悪いかといえ、国会でも村会でも同じだが、人をえらび出す方法ではなくて、議会に代表を送って彼らに政治をすっかりまかしてしまう政治のやり方に欠陥がある。

第一に政治を職業化させたこと。政治を金もうけの商売にしてしまったこと。第二に政治という、もっとも微妙な人間と人間の関係を、二は一より多いという初級算術でむりに割切ろうとし、そのばあいのあまりを計算にいれていないこと。第三にそこで何が正しいかとか、すじがとおっているかという尺度はわきに押しやられ、人間がただの数になってしまい、人間の道徳的な責任などかえりみられなくなったこと。かつての吉田首相が自由党

は国会で多数をしめている。ゆえに国民に支持されている。だから自由党のすることは国民の意志であると言って、あれだけの汚職、失政、スキャンダルをおこしながら平然として外遊してきたことは、数字化して人間らしさを失った政治家の典型である。第四に、人間が本能的に持っている権力欲を抑えるようなどんな工夫も議会政治のうちにはほどこされず、むしろ人間から道徳的能力をうばい権力欲をそるよう仕組まれていること。など、など。

このような根本的な欠かんをもつ政治制度に代表をおくって、それによって新しい社会をつくろうと思うなどは気がいざたといえよう。

これはお互に反省しましょう、自しゅくしましょう、ぐらいの小学修身式批評でおさまることではない。もっとときびしく議会政治、民主政治そのものへの批評が民衆のなかからわきおこってこなくてはならない。

【あきまつ】28号 一九五五年一月

### 革命は起こり得るか？

「我々は戦争によって、着たきりスズメになってしまった。タンスの底をかきまわして子

供に厚生服をようやくつくろってやっていたのは、ほんの三、四年前だ。衣料が豊富に市場には出廻ったが、我々労働者の家庭では、四季の着物をそろえていけるような余裕はない。親も子供も季節が来るごとに、豊富に出廻った衣料を眺めては、一層みじめさを感じるだけだ。

「たまたま賃金が上がったと思えばその何倍も物の値段が先が上がって居り、麦を買うのにせい一パイで衣料までは遠くとどかない。寒さが増して来るにつけ、ガキどもがかわいそうでたまらず、ヤケに旗でも振りまわして見たくなるではないか……」

「以上は過日当社が『革命は日本に起こり得るか』という題目で或る炭坑に於て討論会を開催した後、一鉱員から寄せられた文中の一節であるが、彼らはただ自己の賃金問題にのみ捉われて、現在の状態を不自由とも不幸とも感じていない。あるいは感じていたとしても、彼らはコミニズムに対して教えこまれた反感と恐怖を抱いている。あるいは無気力、怠惰、遅鈍で、「解放」を自身の問題として希求するに到っていない。」

「不自由を不自由と自覚せず、自らの力で自由を獲得しようとしぬものがどうして『革命』の原動力となるであろうか。また大衆の支持なくして、ブルジョア民主主義革命にせよ、社会主義革命にせよ、成功するものではない。」

権力に対して不思議なほど卑屈な大衆個々の実態を見誤って、自分たちの味方だとウヌボレてはいけない。フランス大革命が起こった当時のフランスの生活状態は、当時のドイツやイスパニヤに比べて、ずっと楽だったのだ。しかしフランスの平民階級は、貴族、僧侶の横暴、苛酷な重税、ルイ十六世ならびに側近の弾圧に抗して立ち上がったのだ。つまりフランス大衆は自由と解放に対する欲望が強かったために蜂起したのである。

炭坑労働者に限らず日本の全組織労働者が、如何にも革命の母体の如き感を与えているが全国にはまだ未組織労働者の数が多く、殊に農民との提携も融和もできていない。今次の各産業のストライキに於ても、はたして労働者階級の支持を全面的にうけることができたであろうか。それは不幸にして、否といわざるをえない。全労働者階級の支持どころか、同一単産の内部においてさえ、その統一を欠いていた。かかることは、労働者階級自体が、不自由を不自由と自覚せず、権力に盲従している一つの実証である。

権力への反抗なくして、又権力を撲滅せずして、労働者階級の自由も、幸福も、解放も、ありえないであろう。

『平民新聞』(飯塚) 37号 一九五二年二月

### 人類の滅亡を願うもの——煽られる再軍備——

たった一発の原子バクダンでさえ広島や長崎をそのような惨めな状態にまで破壊してしまつたのに、いままたその原子爆弾の数千倍もの爆発力をもっているといわれる恐ろしい水素爆弾が、アメリカで実験に成功したと、米紙ロサンゼルス・エグザミナーが爆発実験の目撃者談を掲載し、各方面の注目を浴びている。

この目撃者談によると、水素爆弾の爆発と同時に幅〇・八キロ、長さ約四・八キロの小島は一瞬のうちにガスとチリに化して吹っこんでしまい、あとかたもなくなってしまったとのことである(場所は太平洋上のエニウエトク環礁)。この水素爆弾の実験から見ると、これまでの原爆などは全く比較にならぬ程小さなものだといわれている。

このような恐ろしい爆弾が今後の戦争には使用されることを思えば、今後は如何なる犠牲を払っても戦争を起してはならない。なぜならそれは人類の滅亡をきたすものであるからだ。過日アリソン米國務次官補が来日して、今こそ日本は再軍備をする時だ、などと力説していたが、「生兵法大けがのもと」という諺どおり、国防のためだなどとオダテられ、僅か

ばかりの軍備をして下手にまきぞえをくえば、日本など一たまりもなくガスとゴミになって吹っ飛んでしまう。これは大怪我位でおさまらない。それこそ大和民族とかいう日本人の滅亡である。

米国の大統領が来年からアイゼンハワーとかわり、アメリカの対外政策も当然変わってくるだろう。もしも日本が再軍備をして国連に加盟し、米兵と交代して朝鮮へでも出て行くことになれば、日本中が広島や長崎の二の舞はあきらかなことだ。

そんな危険な橋は渡りたくないからこそ、軍備もしたくないし、今の平和憲法を絶対護り通そうとするのである。大物の再軍備論者は別として何もわからない人々が、軍備をすれば失業者がなくなったり、景気が良くなるように考えたり、軍備がないとソ連や中国あたりから侵略でもしてくるようになるが、軍備を持つこと自体が、前記のような危険な場所へ立入ることとなり、税金を一層多く取られ、いよいよ耐乏の生活を押しつけられることとなるのである。次に侵略侵略と今にも何処からか日本を乗取りに来るかのように宣伝する輩があるが、ほんとうに日本を乗取るう、侵略してしまおうと思う国があったとしたら、なまじっか軍備をしたところで同じことだろう。

この辺、もう一度われわれはとっくりと考えてみたいものである。やっぱり大砲のタマを

造るために税金を取られるより、税金を出さないとウマイものが食えたり、文化生活ができるような世の方が、よほどありがたいのではなからうか。

『平民新聞』(飯塚) 34号 一九五二年一月

### 世界平和者会議

待ちのぞまれた世界平和者会議が四月一日(一九五四年一註)から東京をはじめ、全国主要都市でくりひろげられた。十数カ国の熱意ある同志の、全世界を平和の二字にむけて結集しようとする悲願はやがて達せられるであろう。

我々の住む日本に於ては、平和を叫ぶことがまたしても白眼視されるようになって来た。数多くの妨害と弾圧の嵐さえ吹きあれていることは、まことに悲しい現実といわねばならない。この間、あらゆる障害を克服して、世界平和者会議を開催された諸団体の辛苦に対しては、ふかく敬意を捧げねばならない。

日本の国内においてすら、真の平和運動を結実することの遅々たる現在、世界平和を云々することの、あまりに観念的であるとするとしりは、或いはこれを甘受せねばならないであ



る。しかし我々はいかなる嘲笑と侮蔑のただ中にあっても「世界は一つ」への口をつぐむことは出来ないのである。世界平和者会議の声が如何に小さくても、我々自らこれを過少評価するようなことがあってはならないと思う。次期戦争準備のための爆音が正しき者の声を打ち消すことも、それが暴力である限り当然のことである。我々はいさぎよくこの暴力を身にうけてのち、進むべきなのである。

如何なる理由によっても、平和を達成するための手段は、柔和にして、光あるものでなければならぬ。我々に敵はない筈ではないか。力による動物的な安定は決して真の平和たり得ないからである。現在の日本が真に、世界の前に平和を希求する正当な権限を有しているとはいい難いであろう。日本国憲法制定当時はとにかく日米安保条約によって、外部からの武力攻撃に対して、アメリカ軍隊を使用することを国の名において認めているからである。我々はこのような誤りを犯したことについて、全世界の平和者に対して恥ずるところがなければならぬ。しかしこのような傾向が日本人の意志の総てでないこともまた厳然たる事実である。戦争によって子を夫を兄弟を失ったもの、原爆によってたおれ傷ついたもの、長く外地にあり、今故郷の土地を踏まえ新たに日本に息吹きを与えんとするもの——これらの人たちの真剣な叫びも、今度の平和者会議を通じて、ほとぼしり出ている。戦争による痛手が

大きければ大きいほど、平和への熱望はより強いのである。それは如何なる弾圧にも碎けることはないであろう。

「戦争」の二文字に脅えて、左右を見廻す人々も、心に打たれるところありながらチュウチヨする人々も世界の良識が訴える言葉の前に新たなる勇気を覚えるであろう。我々はかりそめにも傍観者を指さして、卑怯者呼ばわりをするような愚かさを示してはならない。

真の平和者は万人をして、平和への旗印の下に抱容し得る、自らなる力をそなえている筈だからである。それは自ら革命する人であるといつてよいであろう。物資の力を己が恃みとし、水爆の威力を誇示し、その結果自身をも傷つける人々と相対比するとき、世界の将来がいずれの側の手に委ねられるかは、もはや論ずる余地を残さないのである。

『あきまつ』20号 一九五四年四月

### 世界平和と人間革命

全世界を破滅しうる水爆がすでに製造された今日、破滅から人類を守り平和を確立するという問題は一国民一族の課題ではなく、全人類共通の課題となった。

破壊兵器製造に浮き身をやつしている少数の権力者がいる反面、世界平和のために仲良く手をにぎって働く平和主義者もいる。破壊主義者も平和主義者も等しく愛と自由と平和を人々に語っている。言葉だけではいづれが本物であり人類の友であるかを我々は判別し難い。しかし両者を区分する一つのカギがある。それは物を集めようとする者と無手になり裸になることに平気な者である。臆病な者は自己の弱さを補うために武器を欲しがり、勇気のある者、正しい者は相手の善意を信ずるが故に身を守る武器を欲しない。そんなものはなくとも人は互いに相和していけることを確信してケチな武器を捨てることを喜ぶのである。

世の人々は強大な武器を所有する者を強者、偉大な者と誤認している。真に偉大な強者とは何らの武器なしにこの世に平和をもたらし、隣人と相和し得る人間をいうのである。

平和の問題を考える時、我々は単に原水爆の破壊から人類を守る事をもって事足りりとするものではない。これはただ当面の問題で、根本的な世界の平和とは各個人が自由と健康を獲得するという基盤の上のみ確立される。人間が社会 (community) と呼んできた所のもの、即ち家族・民族・国家などは等しく個人の自由と完成に役立つものである限り、意味あるものでありかつ正当なものなのである。又人間個人は如何なる社会の道具とも手段ともなり得ない尊厳性を有する存在である。為政者はこの点を銘記してその任にあたるべきで、さ

もないと彼は暴力者、破壊者とならざるを得ないであろう。

われわれは世界平和のために、まず、人間自身の改造、人間革命に大きな期待をかけている。今日の公民館運動も人間革命、即ち個の完成への一端である。

人間革命とは永遠の課題であるかも知れない。しかしわれわれはこれを実現せずにはいられない。世界が臆病な、そして人間の善意を信じることのできない者共によって牛耳られているのを見るとき、その念を益々強くするのである。

『あきまつ』41号 一九五六年四月

### 原水爆禁止運動所感

原水爆の恐ろしさを味わった広島・長崎の人は別として、日本人の中で何多が真剣に原水爆の恐ろしさを痛感し、これを廃止しようとして動いているだろうか。年一回行われる原水爆禁止大会に代表が参集して叫んだだけで、決して禁止・廃止が行われるものではない。それでもまだ、大会に代表として出て来る人は、保守も革新も原水爆だけは止めさせねばいけぬ。死の灰 (放射能) は恐ろしい、と言うこと一点に結集したものには間違いはない。と

ころが、大会から故郷へ帰ると、この感激はさっぱりと忘れてしまい、翌年また何処かから誰かから呼びかけがあるまで原水爆禁止運動は、開店休業という形になってしまふ。

東京に集まった代表の顔ぶれは、大半の人が組織人か、それに近い人である。そうした人達が、自分の職場、自分の団体あるいは地域へ帰って、大会での決議、大会で叫んだことを実行するならば、もっともつと原水禁運動は大きな勢力となって、世界の世論をより以上に喚起し、実験禁止も、ひいては廃止までも可能となるのではなからうか。

広島―東京間一千キロの平和行進が、京都―高槻間に差しかかった際、たまたま自衛隊の特車部隊（昔の戦車隊）行進と出会った。そのとき自衛隊員は、自らの行進を片隅へよけて原水爆禁止平和行進に道を明け、隊長以下全隊員が手を振り振り平和行進を先行させたという。この事実は何を物語るであらうか。自衛隊員といえども、原水爆の禁止を希っている。しかるに人民のこうした願いをよそに、原水爆の製造・実験は今日なお行われている。われわれはこの事実をしっかりと認識しなければならぬ。

東京大会に於て、最も私を憤激させたものは、私のように五円十円と街頭募金による淨財で、旅費ぎりぎりです上京した代表でなく、もっと安易に上京することの出来た人々、いわゆる組織人または、それに近い人達が会議の途中から姿を消したり、甚だしい人は出勤簿に印

鑑でも押す如く、出席早々終日いなくなってしまったことだ。そんな人達に限って帰りにほ持ちきれぬ程の土産物をかかえ込んで帰っている。こうした物見遊山の代表をも集めて開かれる処の大会のあり方にも、今後検討の余地はあるが、また一方には驚嘆すべき熱意をもって、人一倍活動的であり実践的ではあるが、何か自分の意図する方向へ引きずって行かねばおさまり切れない、という一群もある。そのような人は「ソ連が自発的に原水爆実験禁止をしたのであるから、大会の名に於てソ連へ感謝状を送っては」という決議までさせようとした。幸いにして、それを止める勢力も混っていたので感謝状を送らずに済んだが、若しもあれば決議されていたら、今頃は八千円も負担して集まった代表は全部笑われ者になっていた事であらう。

なお大会で、奇妙なことを青森県の純朴な農村青年が訴えた。

「私達は何も知りません。ただ原水爆の恐ろしさを教えられ、これを廃止せねばならないと信じています。今後その運動を続けるために大会へ出て色々なことを知りたいと思いましたが、金もないので青年会で話し合い四人が自転車に参加する事を決め、青森を出発したのですが、途中から原水協の行動隊という人達が加わり、今日は百キロ踏め、明日は百二十キロペダルを踏めと命令され、村々で集会を持たされ、ヘトヘトで身体をコワサンばかり。一

体、行動隊という性格を本部理事長は説明して下さい」

これに対する説明はアヤフヤにされたが、このように命令的・強制的にあるいはまた宣伝的に、自由な素朴な善意をへしまげ引きずろうと意図する何者かがあっては、原水爆という大問題は決して成功するものではない。

私達は、思想も宗教も閥も超越して、原水爆禁止・廃止という一点にこそ、まとまるべきではなからうか。これは原水禁の日常活動にとっても、最も注意すべき点である。